

## 春彼岸廻向供養之文

敬って真言教主大日如来、两部界会、諸尊聖衆、殊に総じては尽空法界、一切三宝の境界に白して言さく。

「春なれや名もなき山の薄霞み」――。あの寒気、疾風、厳しき冬の峠を越え、霞み立つ春日、春風春水一時に來たりて、躍動の季節となりぬ。二十日は、春彼岸のお中日”と呼ばれかけてはよく親しまれた、春彼岸の中び”である。今は「春分の日」となり、国民の祝日”になった。この日は、日本国憲法においても「亡き人を偲び祖先を敬う日」と規定され、亡き人を追慕する国民の休日である。この定義は大切に覚えておきたいものである。さらに春と秋の彼岸について根本の意味をよく心得えて、相続してゆきたいものである。それは彼岸の中日を真ん中にはさんだ前後の三日間を合わせて七日間は、少しでも自分の人間性を高めてゆこうと、誓願する。”人間を高める願いの週間”である

といわれる。

ふだんは生活にかまけてて、自分自身のあり方を考えるゆとりが持てない。たまたま彼岸会にあたり、ふと「自分はこれでよいのであろうか？」と振り返る時である。こうした大切な縁えんを気づかせられたのは、実は亡き人のおかげでないだろうか。もしも、その人が生きておられたら、おそらくは自分のありようなど思いもしなかったに違いない。大切なその人の死によって自分を学ぶ機会が恵まれたのに外ならないのではなかったか、と考えてみてはと思う。

この心がけ謝念しゃねんに基もとづいて、初めて「祖先を敬い、亡くなった人々をしのぶ」お墓まいりの墓参、お寺参りとなる彼岸詣での意味を戴けるのではないだろうか。

ところで親の心というものはいつも子供へ子供へと愛情をこめる。親にとって、我が子の日々の成長を目に見るのが、何よりのしあわせである。昨年身につけていた服や靴が今年は

子どもは身体に合わないのを見て、親はわが身に積もる老いを忘れて、涙を流して喜ぶのである。この平凡な道理がわかれば正しい先祖供養が出来よう。即ち自分の心の成長を亡き人に明らかに見て戴こう。そして仏にご照覧賜わろう。お目にかかることである。そのためにも自分の人間性の向上に励もうという意欲に燃えよう。

この人間性を高めよう、との願いの実践が即

ち、布施ふせ・持戒じかい・忍辱んにく・精進しょうじん・禅定ぜんじょう・智慧ちえ  
ろくはらみつ　ろくど

六波羅蜜の六度である。この六度・六つの実践はそれぞれ独立して他と無関係にあるのではない。どの行為でもいいから一つの行為を実践すると、必ず他の五つの行為を伴うことになる。ルーツが一つだからである。されば、どれでもいい。自分でできそうなことを一つ選び、その実行に徹することである。

必ず他の五つの徳目も深めることになる。例えば、布施の行は「他にもよくしてあげよう」との行為に“精進”してゆけば、自分の行為もつ

つしみ”持戒”となり、辛抱、つまり“忍辱”、  
忍ぶこともできる。そしてどのようにしたらよ  
く尽くせるであろうか、と”智慧”も磨ける。  
そしてついに、自他の心身ともに安らぐ”禅定  
”が生まれるのである。

“念ずれば花ひらく”の名句で有名な詩人・  
坂村真民さんはうたう。「小さなことでいいで  
す／あなたのむねのもしびを／相手の人に  
うつしておやり」と。

エスカレーターが混んでいる時、乗れたら「お  
先に失礼します」と声をかけましょう。乗車券  
を買い終わって後に人がいたら「お先にすみま  
せん」とねぎらおうではありませんか。

要するに今“この一人”から始める。身近か  
ら人に奉仕するなら、よい意味での連鎖反応と  
いう縁となり、次から次へと功德が積まれてゆ  
くのである。

春彼岸会を執り行うにこの一事の実践を提  
起して奉ります。

乃至法界 平等利益

令和三年三月二十日

京都府向日市寺戸町

亀光庵 土口哲光 敬白